

く特殊な問題領域ではない。女性研究者やジェンダー研究の問題意識を軽視することなく、この重要性を次世代の研究者に説いていくことが必要といえる。

さらに、代表的なフェミニスト神学であるエリザベス・シュスラー・フィオレンツァは、研究者は二つのホームを持つべきであると述べている。これは、アカデミー内での議論と、現代の女性の政治社会的苦闘の両方に応答責任があることを研究者は自覚するべきだ、という意味である。研究者が排除されている人々を代弁するのではなく、その人々が語ることの出来る場を広げるように協働することは、フェミニスト人類学などフェミニストリサーチの基本理念である。研究者がどのような社会的特権を持つのか自らの立ち位置に向き合い、ともに解放を支える語りを形作っていくことが必要である。

イスラーム言説の利用と法識字

——女性説教師を事例として——

嶺 崎 寛 子

本発表の目的は、イスラーム言説の利用におけるジェンダーについて、カイロと、カイロ近郊農村で活躍する二人の無名女性説教師とその勉強会を事例に、権威と法識字という概念を用いて検討することである。

近年エジプトでは、衛星放送等のメディアの発達、女性の識

字率向上等を背景に、イスラームが広い裾野を持つようになった。クルアーンやハディース（預言者の言行録で法規範となる）といった原典へアクセスできる層が増加した結果、イスラーム法の再解釈も積極的に行われている。女性の説法師やウラマーが出現、活躍する等、イスラームの知の体系の担い手も多様化しつつある。イスラームの知の体系および知の受容のあり方は、グローバル化や識字率の上昇等によって再編過程にあることは非常に重要である。マフムードが指摘するように、女性によるイスラーム言説はその中でも周辺化されてきた「*Mah-mood 2005*」。しかしそれは、必ずしもマイナスの意味のみを持つのではない。

カイロの女性説教師とその勉強会参加者は、女性のみで閉じられた勉強会空間を逆手にとり、そこでシャリーアの解釈変更をするなどして、「女性の、女性による、女性のための」イスラーム言説を創出していた。参加者たちが積極的に説教師と交渉できる勉強会という場は、彼女たちのイスラームにかかる法識字を育て、イスラーム言説の「カスタマイズ化」への道を開きつつあった。

カイロ近郊農村の女性説教師は、イスラームが女性に保証している権利について、勉強会を通じて啓蒙活動を行っていた。それは結果的に、日常レベルにおいて参加者たちが直面する様々な抑圧や生きにくさに対し、イスラームを資源として対抗する方法を授けることにもなっていた。彼女たちはイスラーム言説を創出するだけの法識字は持たないものの、イスラーム言説を用いて抑圧的な慣習と交渉し、自分たちを取り巻く身近な

パネル

状況を変化させていた。

これらの動きは、一、シャリーアの法規範や、その内包するジェンダー規範という資源を、女性たちが効果的に動員する力をつけつつあること、二、彼女たちが行為者としてイスラーム言説に積極的に関わっていることの二点を示している。ただし、イスラーム言説を使いこなす程度には、彼女たちの法識字によって明らかな差異が見られた。

一九六一年にスンナ派最高学府、アズハル大学が女性の入学を認めて以降、女性たちにもイスラームの知の体系に参入する道が開かれた。現在はイスラーム言説のアクセスに（少なくとも構造上）ジェンダー差がない点は重要である。現在はその解釈が正統性を持つかどうか、言説空間で争われている。説教師たちがそのジェンダーゆえに排除されるという危険性を自覚しつつ、積極的にイスラームの知の体系に参入しようとするのは、正統な手続きを経ることにより、自己の言説に権威を持たせるためである。権威獲得のためには、正規のイスラーム教育およびそれによるイスラームにかかる法識字の獲得が必須なのである。そこにこそ、敬虔であることと女性であることをともに肯定する、彼女たちの試みとその豊かな可能性が孕まれている。参考 嶺崎寛子「イスラーム言説にみるジェンダー戦略と権威」〔ジェンダー研究〕一二号、二〇〇九年、七七―九一頁。

アジアにおけるキリスト教と 脱植民地主義の課題

香山洋人

韓国の民衆神学は西欧的キリスト教の枠組みに依拠せず、朝鮮の民衆的伝統、物語、事件に注目しそれを典拠とした新しいアジアのキリスト教理解である。安炳茂は民主化運動への参加、民衆との連帯、事件への参与を通して現場から神学を再構築した。イエス事件の「福音」の伝承母体は民衆であるとし、「うわさ・流言蜚語」が福音伝承のメディアであったと論じた彼の神学は、そうした「民衆への回心」の結実であった。しかし、欧米神学中心の「普遍主義」を告発しつつも、第一世代民衆神学は自らの中にある男性中心の「普遍主義」、民衆事件や物語の中にある男性中心主義的な権力作用を相対化することはできなかった。

第一世代の民衆神学は、一九七〇年の「全泰壹焼身事件」を取り上げつつ、過酷な労働現場における女子労働者の問題には着目しなかった。しかし、ハーゲン・クーによれば、韓国の労働運動の始まりは実に七〇年代の女性労働者の覚醒にある。第一世代の民衆神学は一九七六年の「東一紡績」事件で露呈される労働組合における家父長的暴力に言及せず、民族主義的な正統性を持つ事件（「東学農民革命」、「三一独立運動」、「四・一九学生革命」）や、「英雄」による義挙（全泰壹事件の他、民主